

双方向型月刊キュレーションメルマガ
“コロナ禍×イノベーション×地方創生”
2021年1月1日 #10

編集発行人: Japa 日本専門家活動協会 代表理事 芝原靖典

発行元: Japa 日本専門家活動協会 <http://www.japa.fellowlink.jp/>



本メルマガは、Japa 日本専門家活動協会が 2020 年 4 月 1 日より毎月 1 日に発行する有料版の月刊キュレーションメルマガ「イノベーション×地方創生」としてスタートしましたが、今般のコロナ禍を受け、コロナ禍の状況、影響、対応等に強い関心が寄せられているため、よりコロナ禍を意識した「コロナ禍×イノベーション×地方創生」に拡大し、Japa 会員、寄稿者、及び会員・寄稿者の紹介による関心者の方々に、当面の間、無料配信することに致しました。忌憚のないご意見等お待ちしております。

本メルマガは、購読者(地方創生に取り組む自治体、企業、各種団体等)と専門家(Japa 理事・会員・寄稿者等)をつなぐ相談窓口機能、及び寄稿者を始めとする専門家(会員)相互の交流のリエゾン機能を併せ持つ双方向型のキュレーションメルマガをめざしています。

INDEX

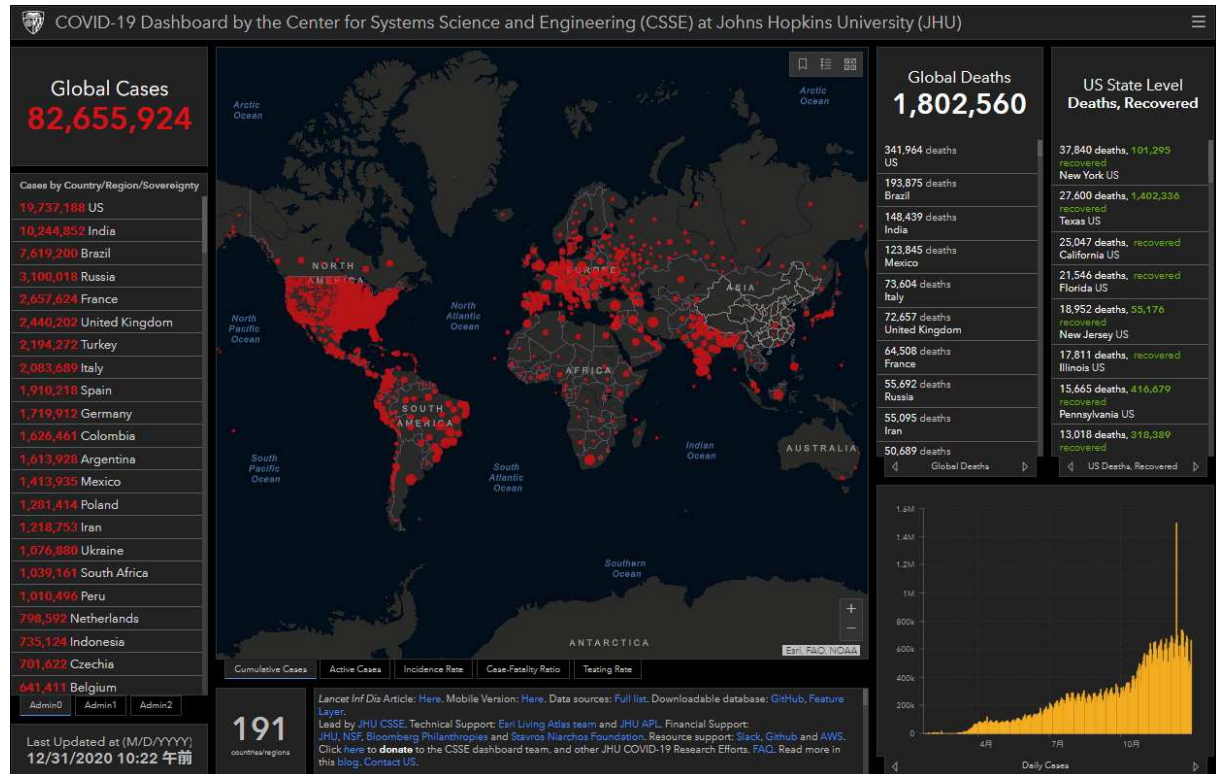
1. コラム「論点提起」： コロナ禍を超えてイノベーションできるか如何
2. キュレーション「関連情報 & Topics」： コロナ禍×イノベーション×地方創生
3. 紹介「海外に学ぶ」： 芸術ハコモノでイメージ転換再生 スペイン・ビルバオ その1
(Japa 理事 小畑きいち: 青山学院大学元客員教授)
4. 寄稿： コロナ禍にみる新たな諸相 (遠藤総合研究所 代表 遠藤たかゆき)
5. 稽古照今・寄稿： 童謡爺さんのどうよう語り 第三話・第四話 (作詞・作曲家 高橋育郎)
6. 解説「関連データ・用語・仕組み」： 新型コロナワクチンの開発状況
7. Blog 仕組みの群像： 新型コロナウィルス禍のこの1年の振り返り
8. つばやき(編集後記に代えて)

注: 担当執筆者名の記載のない項目は、編集発行人(芝原 靖典)による。

※ Japa は「新型コロナウィルス感染症特設コーナー」 <https://www.japa.fellowlink.jp/blank-25> を開設して、アーカイブすべき情報を随時アップしています。ご活用下さい。
また、アーカイブすべき情報があればご連絡ください。

1. コラム「論点提起」: コロナ禍を越えてイノベーションできるか如何

新型コロナウイルスによるパンデミック第三波が襲来し、国際間・国内都市間の移動が再び厳しく制限されるなか、新年を迎えた。新型コロナウイルスパンデミックはいつ収束するのか。



「歴史学者によると、パンデミックの終わり方には2通りあるという。1つは医学的な終息で、罹患率と死亡率が大きく減少して終わる。もう1つは社会的な終息で、病気に対する恐怖心が薄れてきて終わる。『いつ終わるんだろうと人々が言う場合、それは社会的な終息を指している』と、ジョンズ・ホプキンス大学の医学史学者、ジェレミー・グリーンは言う。つまり、病気を抑え込むことによって終わりが訪れるのではなく、人々がパニック状態に疲れて、病気とともに生きようになることによって、パンデミックは終わるとのことだ。」

出典:歴史が示唆する新型コロナの意外な「終わり方」 過去のパンデミックはどう終息したのか The New York Times 2020/05/19 5:25 東洋経済 ONLINE <https://bit.ly/3hosAbS>

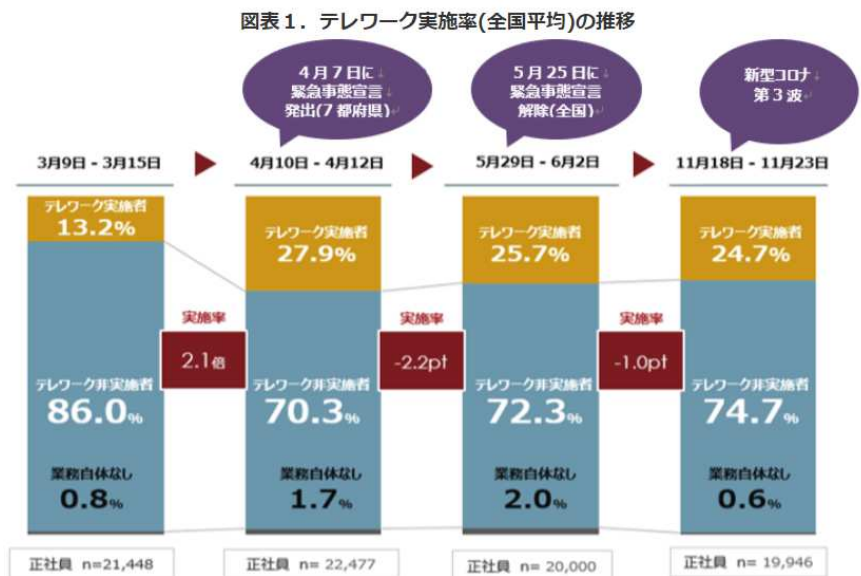
「世界保健機関(WHO)の基準ではウイルスの潜伏期間の2倍の期間、感染者が新たに発生しなければ終息宣言となります。新型コロナウイルスの潜伏期間は2週間とみられていることから、少なくとも4週間、感染者数がゼロにならない限り、ウイルスとの闘いは終わりません。」

出典:コロナ禍はいつ収まるのか 京大・山中氏が出した答え 日経バイオテック編集長 坂田亮太郎 日本経済新聞 2020年4月8日 17:35 <https://s.nikkei.com/3nXiOQq>

上記から鑑みるに、接種され始めたコロナワクチンの副作用のリスクを内包しつつも、世界規模である程度の感染者・死亡者の発生を抑えつつ、with コロナ状態(コロナとともに生きる)に今年中にもって行ければと願うしかない。

このことは、新たな行動変容、社会変容の定着が不可避であることを意味する。この変容を支えるものとして、デジタル/バーチャル技術の活用、つまりはリアル社会とバーチャル社会の融合という「新たな結合」がある。この「新たな結合」は、「イノベーションが興る源」とされているが、はたしてわが国で with コロナ時代のイノベーションは興るのであろうか。

コロナ第一波を受けて、緊急事態宣言が出された時期に一気にテレワークが進んだが、解除後はテレワーク実施率が下がり、第一波より遙かに深刻な現下の第三波においてもテレワーク実施率が上がってこない。テレワークを体験した人の78.6%がその継続を希望しているにもかかわらず、企業として変容の定着ができていない。



出典: 第四回 新型コロナウイルス対策によるテレワークへの影響に関する緊急調査
パーソル総合研究所 2020年12月16日 <https://bit.ly/38DuBq3>

コロナ第一波から10ヶ月立つにもかかわらず、医療崩壊が危惧される状況を招き、外出・接触自粛を要請しながら、それとは真逆のGoToトラベルが経済政策として打ち出され、迷走している。ワクチン開発も後れを取っている。コロナ禍以前の政策・施策からの脱皮(変容)ができていない。

出典: 日本医師会が「医療緊急事態」で騒ぐ本当の理由 医療が逼迫する原因は感染拡大ではない
2020.12.25(金) 池田 信夫 JBpress <https://jbpress.ismedia.jp/articles/-/63431>

かように、実態と経営・政策にギャップが顕在化している状況は、イノベーションが興りやすいとも云える。従来の供給者側から考えるのではなく、利用者側/生活者側からの視点「で考えることにより、変容がスムーズに行くのではなかろうか。例えば、GoToトラベルで観光関連事業者支援を考えるよりも、エッセンシャルワーカー、フリーランス、ギグワーカー等々を含めて誰一人取り残さない」(SDGsの理念)ようにどう対処するか、発想を変えることが変容には不可欠である。

コロナ禍は戦中以来、そして1990年以降の低迷期を通じて積み重なった課題を改めて露わにした。ここでイノベーションに変わる事ができなければ、日本の再浮上は難しい。この1年のありようが今後の日本の行く末を決めることを自覚して、事にあたる必要があると思われるが如何。

2. キュレーション「関連情報&Topics」:コロナ禍×イノベーション×地方創生

▼研究資金配分と論文アウトプットの関係性に係る分析結果について(追加分析) 2020年11月
内閣府政策統括官(科学技術・イノベーション担当)付参事官(エビデンス担当)

<https://bit.ly/38ybkg9>

本資料は、国費としての研究費がどのように論文・特許等のアウトプットに結びついているかを見える化するシステムの構築を目的として、研究力の生産性分析を行っている。その中で、「近年、特に若手研究者における“任期あり”研究者の割合が急激に高まっている。」「論文当たり被引用数については、どの年齢においても“任期なし”<“任期あり”となっている傾向が見られる。」と、「任期付き”の若手研究者への論及がある。たまたま、「科学立国”再生への道”(12月20日)でも、日本の研究者の環境の厳しさを伝える番組があったが、そこでも、“任期付き”研究がいまや66%に達していることが報じられていた。大学の教員も非常勤講師に支えられている。さらに、日本学術会議会員の任命拒否問題もある。何れにも通底しているのが、知的専門家に対するリスペクトのなさではなからうか。特に、イノベーションに結びつくような知の発見・創発は、「生産性」で果たして評価できるのだろうか。「ものづくり日本」「科学立国日本」が溶融化しているいまこそ、「知的立国日本」を目指すべき研究環境づくりを総合的俯瞰的に検討して欲しいものである。

【関連資料】 新型コロナで揺らぐ「科学立国ニッポン」の土台 NHKスペシャル「パンデミック 激動の世界」シリーズ 田部康喜(コラムニスト) 2020年12月25日 WEGDE Infinity
<https://wedge.ismedia.jp/articles/-/21714>

▼いまが成功と失敗の「分岐点」。日本は自己組織化モデルを目指せ！ 2020/12/17 07:30
Forbes JAPAN 2020/12/17 07:30 <https://forbesjapan.com/articles/detail/38743/1/1/1>

「新型コロナウイルスによって、これまで以上に企業変革が必要」とされる現在、企業変革を考える際の日本企業が追求すべき経営モデルについて論及している。「シュリンク・トゥー・グロー」(いったん無駄を削減して態勢を立て直してから成長する)、「セルフ・ディスラプション」(自己否定と創造的破壊)、「ポートフォリオ・オブ・イニシアティブ」(ポートフォリオの奥行きを広げる)といった「欧米型モデルは、日本企業にはあまり適していない」として、「メビウス運動(自己組織化モデル)」を提唱している。この自己組織化モデルの留意点として、成長(スケール化)の仕組みづくりを指摘している。そして、「スケールする上で不可欠なのがデジタル・トランスフォーメーション(DX)で、“仕組み”にできることはどんどん仕組み化し、匠はさらにその先へと深めていく。それを両方進める。日本の強みはフィジカルのリアルな現場にあり、デジタルとリアルをハイブリッドにできれば日本なりの強い経営モデルができる」。これは「観察を重視する帰納的モデル」であり、「事業現場」ではなく「顧客現場」が重要と指摘している。確かに、日本にGAFAやユニコーン企業が少ないのはこれらの点にあるのかもしれない。工場のような管理可能な環境の「事業現場」を想定したPDCAから脱却し、変化が激しいVUCAワールドの時代には「顧客現場」の状況にあわせ、計画の前に戦略が必要とするOODAに切り替えることが肝要ではなからうか。

【関連資料1】 第1回 VUCA時代のプロジェクトとプロジェクトマネジメントの方向性 Tetsuto Yoshikawa 2019/10/07 10:17 <https://note.com/ppf/n/nf7b46c4e40dd>

【関連資料2】 日本を支配する呪縛「PDCA」は日本ガラパゴスの概念。激変する現代社会では新しい理論が必要 2018.10.24 松井克明 <https://hbol.jp/177097>

▼インタビュー・対談 遅れていたはずの国が、一気に先進国を跳び越える。これが「リープフロッグ(蛙跳び)だ! 野口 悠紀雄 2020.12.21 本の話 <https://books.bunshun.jp/articles/-/5959>

野口悠紀雄氏の「リープフロッグ」(文春新書)の紹介対談である。「リープフロッグ」(蛙跳び)とは、「歴史のダイナミズムを包括的に説明しようとするマクロ歴史理論の一つ」とのこと。世界の歴史において、「目覚ましい発展の背景を調べると、そのほとんどがリープフロッグで説明できる」と云う。リープフロッグは換言すれば、「リバースイノベーション」、「ローエンド型破壊的イノベーション」の結果としての現象とも云える。インタビューの最後に、「個人や企業についても、“リープフロッグ=逆転勝ち”がありえます。個人や企業が逆転勝ちできるような社会でなければ、国全体が他の国をリープフロッグすることはできません。逆転勝ちが可能な社会構造を維持すること、そして、一人一人が逆転勝ちの可能性を信じて、政府の指導や補助金に頼ろうとせず努力を続けることが必要です。それができれば、日本はリープフロッグし、再び世界の注目を集める国になるでしょう。」とある。行政の指導と補助金に頼りがちなわが国の現状に対する叱咤激励を感じる。コロナ禍にある今こそ、こうした歴史的視座に基づき、いろいろ考えてみたいものである。

▼「一貫性のある人生を歩まないといけない」って、実は幻想なんです—文化人類学者に聞く「対話と学び続ける姿勢」の大切さ 2020.12.17 BLOGOS <https://blogos.com/article/504587/>

文化人類学の専門家の松村圭一郎氏(岡山大学文学部准教授)へのインタビュー記事である。「役に立つ」状態とは、特定の状況において課題と解決策になり得る知識がマッチすることなんです。だから「役に立つ知識」と「役に立たない知識」があるわけではない」ということで、「自分の置かれている状況を把握して、情報を取捨選択し、課題に対して自分なりの解決策を導き出す力、“知恵”が重要」とのこと。そして、知恵の要素である、自分の置かれている状況を把握する力を育むためには「対話」が重要であり、対話を通じて、「相手との差異を知ること、はじめて自分もつ当たり前の輪郭に出会えるからです。自分がとらわれている当たり前に気づくことで、それまで見えなかったものが見えてくる」と云う。「既存のカテゴリから抜け出して、相手を固有の人として見ることは、固定したカテゴリから自分自身も解き放つことになる。それが既存の枠組みから抜け出すきっかけにもなる」。さらに、自分自身に対しても「自分で自分に飽きていい。無理にこれまでの自分のあり方を踏まえて一貫性を保とうとしなくてもいい」と云う。組織についても、「知識量や経験の多さだけがものをいう組織構造になっている。過去の成功法は、そのとき固有のもの。枠組みを押し付けずに、自分を開いておく」ことの重要性を指摘している。なんとなく、レジリエンスを想起させられる。文化人類学者の言葉は奥深い。いろいろ考えさせてくれる。

▼建築家・豊田啓介氏に聞く、デジタル×フィジカル融合の先にある未来の人間と都市モデル PwC 【前編】2020-11-27 <https://pwc.to/2L2wye8> 【中編】2020-12-04 <https://pwc.to/3hik7a2> 【後編】2020-12-11 <https://pwc.to/38BWu8v>

本稿の前編では「その場所に行かないと体験できない価値の重要性」、中編では「今後は人々の離散化・流動化が進み、生活拠点が分散化する」、後編では「バーチャルとリアル of on/off の感覚の切替についていけない人間がスマートシティのボトルネックになる」等、興味深い議論を展開している。コロナ禍を受けて、行動変容、社会変容が起きつつある今、「コモングラウンド」の必要性・重要性を提唱する建築家という枠を超えた技術感、人間観等の見方・考え方は面白い。参考になる。

3. 紹介「海外に学ぶ」： 芸術ハコモノでイメージ転換再生 ス페인・ビルバオ その1

(Japa 理事 小畑きいち:青山学院大学元客員教授)

ビルバオは、スペイン北部のバスク自治州ビスカヤ県の県都。ビルバオは中世に聖地サンチアゴへの巡礼街道として栄えた宿場町に始まる。今でも旧市街のネルビオン川沿いに、一部中世の風情が残る。人口は約35万人、周辺を含める都市圏としては約100万人規模である。ビスケー湾から19km 遡った位置にある工業都市かつ河口都市である。バスク自治州の中心都市でもある。



ビルバオ市地理位置

19世紀には良質な鉄鉱採掘により鉄鉱山都市となり、ビルバオ港から大量の鉄鉱石が欧州を主とした国外に輸出された。さらに1950年以降は造船業、化学工業なども発展し、鉱業から工業都市へと発展を遂げスペイン有数の工業地帯となった。しかし1980年代以降、徐々に重厚長大な産業が衰退に向かい、ビルバオ市も衰退に向かった。1980年代には市内の失業率も16%以上となり衰退が著しかった。

バスク地方は、スペインとフランスにまたがる独自の文化と他のユーロップ系と異なるアジア系に近い独特なバスク語を持つなど独自伝統を有する民族地域であることから長い間、独立運動を繰り広げ、スペイン政府と武装集団「バスク祖国と自由」の間で爆弾テロや要人暗殺など血と血で争う戦闘が続いてきた。スペイン政府は、政治・行政権限を委譲する地方分権を進めバスク民族を懐柔するために1979年には大幅な自治権を認めバスク自治州とした。また自主徴税権も認められ、このような寛容なスペイン政府の政策によってかつて過激的だった独立運動は鎮静化して、独立への盛り上がりを抑える役目を果たしてきた。その結果、2006年には過激組織「バスク祖国と自由」は停戦を宣言し、現在は平穏を保っている。

***戦国時代に来日のイエズス会宣教師のフランシスコ・ザビエルはバスク人貴族出身であった。**

こうした自治権拡大で、自主財政、政策調整、都市計画など施策の横断的な調整が可能となり、スペイン中央政府の関与なく、バスク自治州政府は財政基盤がしっかりしたことで基盤整備などの地域開発プロジェクトが主導出来るような行政基盤ができた。

バスク自治州は、税徴収に関して特権を付与され、独自に税を決定して徴収できることから、経済活動などに雇用創生に対して柔軟な企業誘致・集積などに対する施策提案を可能となった。

しかし、国からの移転支出・補填がなしとなり、国に対して外交・国防などに関する分担金を国に支払義務を負うこととなった。従来型の工業都市から見切りをつけ文化振興による産業構造の大転換を指向すると決した。地域衰退の象徴となった旧港湾地区の設備の撤去や移転による革新的な都市再生を構想した。その中にはこれまで検討にも入らない文化創造についても考慮することとした。1989年に策定されたビルバオ大都市圏活性化戦略(ビルバオプラン)は、港湾地区再整

備、公共交通・道路など都市基盤、地域産業振興、文化施設の拡充・再修、公共施設の充実など、広範な内容を盛り込んだ。活性化のための基本理念として、開放化、多様化、統合的、近代化、創造的、社会的、文化的の7要素を掲げた。その実施のために、人材への投資、近代的サービス産業都市への転換、移動アクセスの重視、環境保全、都市再活性化、文化創出、官民協働、社会共生を都市再生ソリューションの命題とした。

ビルバオ大都市圏活性化構想において、ビルバオ市内を流れるネルビオン川に沿いのアバンド地区の旧港湾施設跡に革新シンボルとして文化施設新設を構想した。文化創生に対してバスク自治州・ビルバオ市幹部は従来の経緯にとらわれず思い切って外部組織との協働を模索した。同時期に、米国のソロモン・



ネルビオン川と旧市街

R・グッゲンハイム財団は世界的なグッゲンハイム美術館グループを目指す「グローバル戦略」を探っていた。そのような時にグッゲンハイムの美術資産に注目したバスク自治州政府からビルバオ市の再開発構想における美術館進出を打診された。強い危機感を持ち起死回生をねらうバスク自治州・ビルバオ市、グローバルを目指す財団が紆余曲折の結果、利害関係を調整しながら数か月の交渉を経て基本合意が結ばれた。合意は、グッゲンハイムからは美術館建造は衆目を集めるような新奇な外観を求め、美術館建設費用負担など受け入れ側にとってコスト負担が大きく極めて妥協的内容であった。

新進産業の誘致を期待していた地元産業界や市民からの反発もあったが計画は採決された。美術館は設計コンペの結果、プリツカー賞受賞の建築家フランク・ゲーリーの案が採用された。その外観は、船や魚を思わせ自由に流麗な形状で外観はチタン板盤に覆われ光り輝き超現代的で奇抜なフォルムは誰にも強い印象を与えるものであった。外観デザインの新奇性と



グッゲンハイム美術館

近代アートを感じさせる奇怪な建物が衆目を集め評判を呼び、1997年竣工直後から国内外から予想外の年間100万人の来場を数えた。市内外の住民の関心も高めることに成功し、竣工からわずか3年で初期投資を回収できた。



ビルバオ河港跡地

ビルバオ・グッゲンハイム美術館の高い評判で、ビルバオ市の再開発計画のシンボルと見られるようになった。

(つづく)

4. 寄稿: コロナ禍にみる新たな諸相 遠藤総合研究所 代表 遠藤たかゆき)

思いがけずコロナは想定外の町おこしに寄与しました。ご承知の通りオンラインの仕事や学業で地方に、中には沖縄や北海道に移住する人が出てきたのです。コロナ後もこのトレンドは続くでしょう。

そして、IT 関係者だけではない人も、地方農村等に移住又は空き家などに仮移住する人も出ています。特に、農業関係がターゲットとなっています。日本経済の製造業が不振になっても(近い将来大不況になるでしょう)、生存に必須な食糧確保は生活の基本ですから。ただでさえ出人不足の過疎化地帯では、移住は官民挙げて大歓迎されるでしょう。

愛媛県のみかん生産者が人手不足で困っているところへ、都会からコロナを避けて IT 技術者が一時的アルバイトのつもりで農家へ住込み、そのまま移住してしまったケースもあります。また、農業に外国人研修者も不要となります。野菜・果実・米等、農業生産品も経営技術・科学技術のイノベーションで効率よく、かつ、品質・栄養価が高い生産物が出来ます。

例えば、筑波大発のベンチャー企業が遺伝子編集技術を使い(この技術は米仏二人の学者が 2012 年に、従来 10 年かかっていた品種を数年に短縮する技術で今年のノーベル化学賞受賞)、全く新しいトマトが創造されました。これは、血圧上昇を防ぐ成分が通常のトマトより 5~6 倍高いトマトで、厚労省の安全性審査が不要なため家庭菜園向けの苗や生産者向けの種が来年夏には販売されます。

漁業でも次々と新魚種の養殖技術が開発されます。近大マグロだけではなく。逗子市では三浦半島の市場に出荷出来ない不要なキャベツを餌として養殖されたウニが逗子ウニとして発売されます。

林業も新しく木材の乾燥技術の開発で外材の輸入を減少させることが出来、年明けから本格的にスタートするので、私にも事務局を手伝ってほしいとのリクエストが来ました。このように一次産業は地元の人たちと都市部からの移住者の知恵・経験協力で新しい展開がスタートします。

そして、なにより今更ながらの都会生活が一体何なのか、世界に誇る山紫水明の日本の田舎の原風景・風物の心和む優しさに気がつき、価値観が変わると思います。田舎には便利性或医療設備はやや弱いですが、家賃・物価は安く限界集落でさえなければ住みよいのです。

地方を財政的に援助するふるさと納税でも返礼品をその土地独自の返礼品があまりない自治体が民間に業務を委託して新商品を創出し佐賀県のさる町の納税額を 7 倍にした組織を知っています。返礼品は食物類が圧倒的に多いのですが、私の住む鎌倉市では災害・教育・古都保存・教育・介護とか目的別の寄付も願っています。隣の逗子市では十数種しかありません。アイデア次第です。例えば、北海道の地震被災都市厚真町では地元名産果実のハスカップを全国ブランドにするため独自の新しい新製品を企画しています。

ふるさと納税の寄付には問題点もありますが、2018 年は全国で 3,952 千人 5,127 億円という巨額に上り、年々増加しています。Japa のような専門家集団が知恵をお貸しするのも具体的手立てではないでしょうか。

【参考】 仕組みの群像:「ふるさと納税」と「道の駅」 2019_05_23 <https://bit.ly/2WPi6wH>

さて 7 月 21 日の毎日新聞に「コロナの時代に地方分散へかじ切るとき」という記事がありました。要約すると「人口の都市集中型社会は日本を破局に追い込む恐れがあり、地方分散型社会に切り替えるのが望ましい」。

これは広井良典京大教授らが 3 年前に AI を使って日本の将来をシミュレーションした結論でした。広井氏は財政学や社会心理学・医療経済学等様々な専門家たちとチームを組み、AI 技術を持つ日立製作所の研究機関(日立京大ラボ)と共同研究に乗り出し、当初「社会保障のありかたなどが主要な論点になるだろう」と予想していましたが、結果は「集中か分散か」という論点が日本の持続可能性を決める本質であることが分かりました。

この研究グループは、「2050 年日本は持続可能か」とのテーマを設定し、国内総生産や出生率、失業率、幸福感、高齢化等 149 の指標を設定し、指標間の因果関係を検討し、それらを基に AI に計算させたが結果、18 年～52 年に起こりうる約 2 万通りのシナリオが弾き出された。それらを分類したところ、日本の未来が「都市集中型と地方分散型」社会に二分され、後戻りのできない分岐点が 25～27 年頃にやってくる事が判明した。

52 年の状態について、人口、財政、地域、環境資源、雇用、格差、健康、幸福の八つの観点から評価すると、現状のまま都市集中型を貫いた場合、財政は都市への効率的な支出で持ち直すが出生率の低下や格差の拡大はさらに進行し、個人の健康寿命や幸福感は低下すると予測された。一方、地方分散型に転換した場合、34～37 年ごろまでに、地域のエネルギー自給率や雇用、地方税収などの向上に力をそそげば、各観点がバランスよく持続可能になると判断された。

勿論、この判断はあくまで 3 年前のものであり、まして世界を混乱させている現在のコロナパンデミックは予想もつかなかったことでもあります。このことも含め、先述の通り、地方分散が日本の大きな、間違いのないトレンドであると私は判断します。コロナ後の社会と、AI が示した持続可能な未来があまりにも一致していたことに驚きましたと、広井さんも語っておられます。

いずれにせよ、コロナ後の世界、令和の時代の日本の社会は価値観、家族観、生活スタイルを含め、世紀的な否、人類史的な大転換が必要となるでしょう。

自由とは、理想とは、平等とはなどの思想を含めて！！

5. 稽古照今・寄稿:童謡爺さんのどうよう語り(第三話・第四話)

作詞・作曲家 高橋育郎

(第三話)

人間、年齢をとると、昔のことが無性に懐かしくなるものだ。父母のこと、祖母のこと、それから幼な友だちと、思い出していくにつれて胸が熱くなるね。



ところで、爺は耕太という分身を主人公にして、いろいろと思い出を実録風に書いているのだが、このほど、また一冊の本に纏めた。「たのし」の7月号で、あり

がたいことに紹介してもらったのである。内容は昭和初期、10年代から20年代半ば頃までの子供の遊びを主体に実体験に沿って書いた。

とにかく、あの頃の子供はよく遊んだものだ。車社会なんて、まだほど遠い時代だったから、子供はどこでも羽をのばして、のびのびと駆け回って遊んだものだ。

そして、大人もまた「子供は風の子」といって、子供の遊ぶのを目を細めて見ていた。そんな雰囲気もまた子供が無心に遊べる支えになっていたように思う。

いま思うと、当時の子供は、日本の風土の中で培われた伝統の遊び「わらべうた」を、かなり忠実に再現していたと思う。だから、そういう意味で、爺はそれらの体験した遊びを細大漏らさず書こうと意気込んだ。でも、その点は、書いてしまってから、あれもこれもと書き落としてしまったものがあつたね。しょうがないなあ。

しかし、それより何より、日本の子供の遊びは素晴らしいと気づいたね。童謡もそうだが、世界に誇る日本の文化だと、叫びたくなるような気持ちになった。

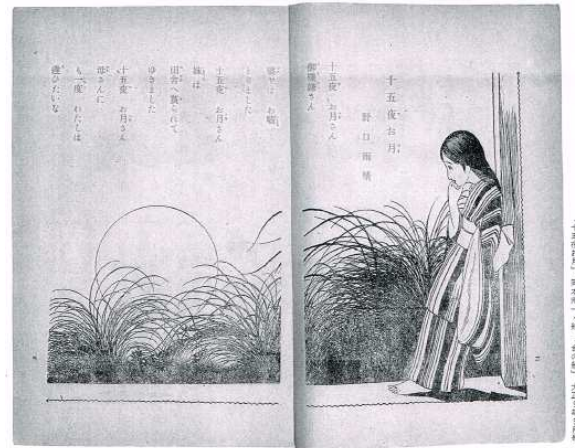
そこで、こんどはそのことを書いてみたいと思うようになった。たとえば、代表的な「鬼ごっこ」や「鬼さんこちら」(目隠し遊び)「うしろの正面だあれ」では、鬼が子供の相手役で出てくるね、鬼が子供の遊び相手で、あの怖いはずの鬼との対比が面白い。鬼とは一体何者か、考えてしまう。

お伽話に出てくる鬼はどうか。「桃太郎」の鬼は、逃げ回って、やっつけられて、宝物まで差し出してしまった、なんともあつけにとられるほどの従順さだ。「こぶとり爺さん」などは、朝がくるまで歌って踊って、無邪気そのもの。ところが鶏の声を聞いて、慌てふためいて逃げてしまう陽気で臆病者だ。「一寸法師」の鬼も一見強そうだが、小さいからだの男の子に飛込まれて、やっぱり慌てふためいて逃げてしまう。どれもこれもお人よしの愛嬌者が多い。このように一見強そうで、意外ともろいのだ。こうした鬼の存在、人間との関わりはどう読みといたらいいのか。興味のある問題

だと思う。

そして、こうしたお伽話は、明治、大正にかけて、ほとんどが唱歌や童謡になって、子供は歌ったり踊ったり、遊びの対象にして、お話が歌とも結びついたから、一層親しみを増して行ったのだ。こうしたお話や歌は、いわゆる文語体を離れて、言文一致の口語体に結び付いて生まれた。

更に、子供の遊びと歌の関わりをみると、大きなウエイトを占めるのは、何といってもわらべうただ。いいかえれば子供たちはわらべうたを歌って、それに合わせて遊んだのだ。わらべうたの話は、次号にまわしたい。



*「子供は風の子」は、いまでは死語になってしまった。昔の遊びを今の子供にですね。

(つづく)

(第四話)

童謡の読みかたは、時代により変わってきたという話をしよう。

言葉は時代によって変わるものだね。童謡も然りだ。童謡という文字が使われたのは、古く7世紀なかばで、蘇我入鹿事変を予言した「岩の上に小猿米焼く米だにも たげてとほらせ山羊の翁」(かもしかよ せめて小猿の焼き米でも食べてゆけ)というのが文献にあって、このとき童謡は(わざうた)とよんでいた。わざと作ってはやらせたから。神わざの歌だから。つまり予言の歌だからという説があるが、面白いのは、子供を仲立ちにするという意味があって、子供は純真で神秘性があり、真似事が好きで、知った事を素直に伝えていく性質があるから、伝播の役割、つまり通信手段として活用したということだ。まったく驚いてしまう話だね。

そのルーツはやはり中国から渡来したもので、中国では治世がいいときは、麒麟や鳳凰が現れたり、逆に天下が乱れると太陽に異変が起きたりすると、童謡がさかんに歌われると信じられていたそうだ。童謡がいまとは違った意味で、何だか不吉な感じのする言葉だったね。そういったことで、童謡は流行歌的な存在だったのだね。「岩の上」が流行ったときに、蘇我入鹿事件が起きたから、この歌が予言したといわれた。ほかに風刺の意味もあったんだ。しかし平安時代になってから、催馬楽(さいばら)や風俗歌(ふぞくうた)に移り変わっていったんだ。

一方、童謡は子供が歌うという意味合いが強くなり、平安中期ころから今様(いまよう)が盛んになってきたとき、後白河法皇が「梁塵秘抄」という今様の選集を出したのだが、この中で子供も歌える歌を、童謡とよんでいるんだね。でも、もちろん大正になって生まれた童謡とは意味合いが違っているよ。

江戸時代になって、童謡は子供の遊び歌となって、定着し(わらべうた)と呼ばれるようになってきた。わらべうたは今も本筋では変わらず、ずっと歌い継がれてきているのだ。

さて、童謡はようやく大正になって、本来の子供の歌「どうよう」として独立したジャンルで登場したのだ。すなわち大正7年7月のことだ。



仲よし小道
作詞 三苦やすし
作曲 河村光陽

このとき以来、童謡は「どうよう」となって、今日にいたっている。1918年のことだからまだ90年くらいきりたっていない。童謡が、どうようとなってから、それほど時間はたっていないのだね。

ところで大正7年7月というのは何が起きたのか。実はこのとき童謡の生みの親、小説家である鈴木三重吉が童話と童謡の雑誌「赤い鳥」を発刊したのだ。これが童謡の始めとなった。

三重吉は夏目漱石の門下生で、「桑の実」や「千鳥」といった小説で知られた存在だった。長女が誕生した時、我が子に良いお話や歌を与えたいものだと見回したが、どうも心を潤す、芸術性豊かな薫り高い作品はないということに気づいたんだね。そこで、ならば自分でそういうものを生み出したらいいだろうと、一念発起して、自分に共感してくれる作家に呼びかけ、そこに集まった優秀な人材の力を得て「赤い鳥」を編集発行したのだ。三重吉の呼びかけには、ほんとうに素晴らしい人材が集まったものだと感心してしまうのだが、おかげで童謡運動に火がついて、見事な成果をあげていくのだ。



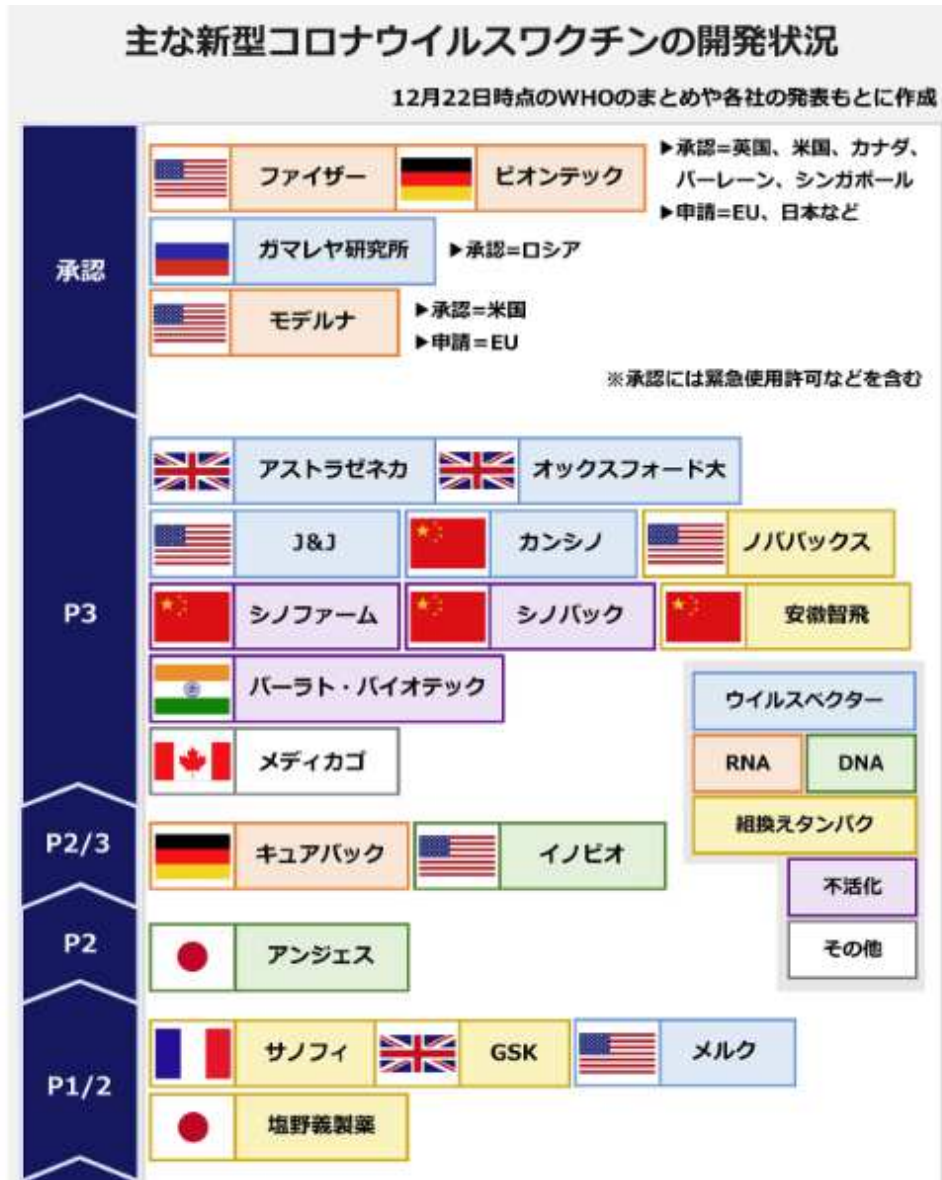
言葉は時代によって変わっていくといわれているが、童謡も然りで、(わらべうた)から始まって(わらべうた)となり、最後に(どうよう)となったんだね。

- *鈴木三重吉 明治15年(1882)広島市出身 東京大学卒
- *昭和初期 改造社が「日本文学全集」を発刊し、中に鈴木三重吉もある。
- *平成30年(2018)の7月1日が童謡誕生100年になる。

(つづく)

6. 解説「関連データ・用語・仕組み」：新型コロナワクチンの開発状況

「WHO の 12 月 22 日時点のまとめによると、現在、臨床試験に入っている COVID-19 ワクチン候補は 61 種類。このほかに 172 種類が前臨床の段階にある」とのこと。



出典:新型コロナウイルス 治療薬・ワクチンの開発動向まとめ【COVID-19】(12月25日 UPDATE) 2020/12/25 <https://answers.ten-navi.com/pharmanews/17853/>

承認され接種が始まったアメリカの2つのワクチンは、「mRNA」(メッセンジャーRNA)という今回初めて実用化された創薬技術タイプで、数年程度かかると言われたワクチン開発を1年弱に短縮するというイノベーションを興している。なお、ロシアの国立ガマレヤ研究所が開発したワクチンは「ウイルスベクター」タイプ、中国のワクチンは「不活化」タイプである。

[参考] 【特集】mRNA 医薬が未来を変える ナノキャリア(株) 最終更新 2020年12月25日
<https://bit.ly/2WNlt2S> 他

7. Blog 仕組みの群像:新型コロナウイルス禍のこの1年の振り返り

昨年(2020年)はコロナ禍で明け暮れた1年であった。Japa 日本専門家活動協会では今回のコロナ禍の経緯をアーカイブするべく、「新型コロナウイルス感染症特設コーナー」
<https://www.japa.fellowlink.jp/blank-25> を立ち上げ、随時、アーカイブすべき情報を選別し、アップしてきた。年末にあたり、その事実経過を振り返るべく簡潔に整理し、ブログにしたためた。

▼Blog 仕組みの群像:新型コロナウイルス禍のこの1年の振り返り

<https://shikumi-gunzo.hatenablog.com/>

8. つぶやき(編集後記に代えて)

PayPal社の前身のX.com社を設立(1999年)し、火星への輸送をめざす民間宇宙会社SpaceXを設立(2002年)し、トヨタの2倍の時価評価額のEV製造販売会社Teslaの設立(2003年)1年後)に参加し発展させた人物は誰であろうイーロン・マスク(南アで生まれ育ち、アメリカで物理学、経営学を学ぶ)である。Tesla株の高騰もあり、2020年末には世界の第2位の長者になった。一説によると、イーロン・マスクの目標は火星に人を輸送し移住させることにあり、そのための資金稼ぎがTeslaであると云う。このスケール感、構想力、実行力、経営力、そしてシンプルかつ論理的な説明力は凄い。アメリカの政治が揺らいでいるが、この民間力は見習いたいものである。

日本においても、小惑星探査機「はやぶさ2」が、小惑星Ryugu(リュウグウ)から約5.4グラムのサンプルを採取しカプセルで地球に送り届け、探査機本体は次なる目標に向かっていく。こちら胸躍る技術力とProjectマネジメント力を見せつけている。このJAXAの「はやぶさ2」プロジェクトを支えているのがNECである。そして、衛星を打ち上げるH2Aロケットの打ち上げサーブスを行っているのが三菱重工業。日本の民間力もまだまだ捨てたものではない。

地球上で右往左往しているコロナ禍対策においても、イノベーションな取り組みを期待したい。

■ 本メルマガは、専門家相談窓口サービスを併せて提供しています。

Japa 日本専門家活動協会(本メルマガ編集者及び理事メンバー)が窓口となり対応させていただきます。本メルマガの内容に係るご相談・お問合せは下記要領にてお願い致します。

件名:メルマガ「コロナ禍×イノベーション×地方創生」について

属性:所属組織名、氏名、役職、E-mail アドレス

問合せ・相談内容:具体的に記載下さい。

送信先:info@japa.fellowlink.co.jp

編集発行人:Japa 日本専門家活動協会 代表理事 芝原靖典

問合せ・連絡先:info@japa.fellowlink.co.jp

発行元:Japa 日本専門家活動協会 <http://www.japa.fellowlink.jp/>

Copyright © 2021 Japa 日本専門家活動協会